

ほのぼの

第54号

令和2年

3月

発行
信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL. 078-732-5209



「まだできる事がある」

住職

今年の大相撲初場所では、幕内最下位の徳勝龍が優勝しました。千秋楽、大関の貴景勝を破つての初優勝です。しかも初土俵から十一年、十両と幕内を行つたり来たりしていた三十三歳の力士です。誰も優勝を予想できなかつた快挙です。

優勝インタビューで「もう三十三歳じゃなく、まだ三十三歳と思って頑張ります」というのを聞いて場内は大歓声でした。力士で三十三歳は、体力の衰えを感じている年齢ですが、現状を「もうダメ」ではなく、「まだこれからだ」と、前進しようとする徳勝龍の姿勢に共感しました。

この姿勢は大事なことです。現実をどう受け入れ、どう転換するかで人生は変わります。プラス思考で行くか、マイナス思考で終わるか。同じ現象が見方によつて意味が違つて受け取れます。失敗を成功のもとと受け取るか、失敗を失敗のままで済ますか。「残念でした」で終わりにするかです。

「私たちには「もう年だから出来ない」と、『老い』を逃げ口上にしがちです。老いは衰えを実感させますが、老いはマイナスだけでしょうか。「雨降って地固まる」と言うように、世の中の事にはプラスとマイナスの二面があります。

生きている「今」・「現在」を、「以前は出来たのにできなくなつた」というのはマイナス思考です。いくら愚痴を言つてももとにはもどれません。不足を言えば切りはない。ちょっとだけ欲を出して「できること」を見つけてみましょう。無理のない範囲で「まだあれもできる、これもまだできる」という活動の場があります。「残念だ」と言いながら虚しく過ごさないようにしたいのです。「今できる」とから始めよう」と、プラス思考で人生を歩むことは、「この世に命を与えてもらつて、今ここに生かされている」事実を「ありがとう」といただて生きる」とです。

いつか誰でも この星に さよならする時が
くるけれど いのちは つがれていく
生まれてきたこと 育ててもらえたこと

出あつたこと 笑つたこと
そのすべてに ありがとうございます
このいのちに ありがとうございます
(竹内まりや)

「恩返し」という言葉があります。受けている恩には、返せるものもあります。返しきれない恩もあります。返しきれない大きく深い恩には、「ありがとうございます」と報いるばかりです。

「恩に報いる」とは、支えてくださつた人の努力が私 の上に生き続けている事実です。親は子供を生み、育て、護ってくれます。それで私は今ここに生きてい る。深くて大きくて返しきれない恩です。阿弥陀如来 の御恩も同じです。返しきれない無量の恩です。

人生における「虚しさと苦悩」は、御恩を知らせてもらうことによって「転じる」とができると親鸞聖人は教えてくださいました。暗闇の中では見えないこ とが、光に照らされると見えるようになる。これが

「転じる」です。

南無阿弥陀仏

古都奈良での研修旅行

新谷 勝



昨年十一月八日、門信徒会研修旅行で奈良公園、興福寺、斑鳩の里法隆寺へ出かけました。

興福寺から参拝が始まりました。東金堂薬師如来坐像を見上げると圧倒されました。続いて奈良のシンボルとして知られる五重塔（高さ約五十m）へ。特別公開中の南円堂では観音菩薩坐像、北円堂では康慶・運慶の傑作、弥勒如來像を拝観することができました。今回の研修では、国宝館に安置されている「阿修羅像」を拝観できることが楽しみでした。数年前、東京での公開で大きな話題となり、一度は観たいと思っていました。「奈良時代の国宝で阿修羅は絶えず天上の帝釈天と争う敵役であったが、釈迦の教えによつて仏教の守護神となり、八部衆の一尊に加わった」と説明されています。阿修羅像は三面六臂で上半身裸の立像に造られ、興福寺一番の人気像ともいわれています。

私の興福寺の思い出は、七十年前の初めての奈良、小学校修学旅行です。五重塔をバックに長い石段に座り、猿沢の池を眺める記念写真が、私にとって宝物の一枚です。

次の目的地法隆寺は、飛鳥時代の世界最古の木造建築と知られ、日本初のユネスコ世界遺産に登録されています。金堂をはじめ五十五棟が国宝・重要文化財、仏像は釈迦三尊、救世觀音、百濟觀音、夢違觀音像など国宝に指定されています。印象付けられた百濟觀音は、像高約二m、八頭身で丸みをもつた柔らかな姿は、優美で慈悲深い表情は多くの人々を魅了しています。国宝、文化財の中には建造物も多く存在し、四季折々の変化で姿が変わる古刹をカメラに収めることも旅の醍醐味といえましょう。

先人が大事に守ってきた古都。晴天に恵まれ、ゆっくりと日本の宝を観ることができました。太平洋戦争で米軍が奈良、京都の文化財に危害を加えなかつたといわれ、現在生きる我々にとって「心のよりどころ」を残してくれたものと思っています。

企画から行程などお世話をなつた皆様に心からお礼申し上げます。次回も楽しみにしています。





本山念佛奉仕団二十回表彰を受けて

小林 元子

私と信行寺さまとの仏縁は、昭和五十七年ごろでした。その頃から法座の案内を頂き、私はまだ仕事についていましたので、時々夜の法座にお参りさせていただくようになりました。退職後、坊守さんからのお誘いを受けて、平成十一年初めに奉仕団に参加しました。ちょうどその時から御影堂の修復工事が始まり、大瓦の清掃をさせてもらつたことが大変うれしく印象に残っています。それから二十年間、一度も休むことなく毎年参加できることは家族やお世話いただいた皆様のおかげと感謝しています。



今年は十五団体、三百七十名の参加者でした。御影堂の置拭きの後、百華園（「門主様のお庭」）での「門主様との記念写真」と「面接、鴻の間（国宝）での抹茶接待を受けました。二日目の朝六時の晨朝勤行は、すがすがしい気持ち

で一日の始まりを迎えることができる体験でした。奉仕団に参加したおかげです。

閉会式の時、信行寺としての参加回数三十五回、坊守さん三十五回、佐野さん十五回、私二十回の表彰を有難くいただきました。お念佛の仲間の皆さんと一緒に清掃奉仕を通して、浄土真宗のみ教えにあえた喜びを味わいました。ありがとうございました。今後も続けて参加できればうれしいと思います。



令和初めての新年初法座

森本 勝

令和二年一月五日、信行寺の新年初法座がつとまりました。

午後一時からお勤めが始まり、

住職の今年最初の法話がありま

した。その後、二階の礼拝堂で

有志の方々が持ち寄ったおせち



料理をいたしました。「馳走をいただきながらやがて余興が始まりました。木下さんの伴奏で藤川さんが「いのちの歌」を歌い、美しい歌声が響き渡りました。そして、木下さんのピアノと副住職のモンゴル民族楽器「馬頭琴」の演奏がありました。その伴奏に合わせて、「あいりさいり屋」「ふるさと」「荒城の月」「恩徳讃」などを全員で合唱し、「にぎやかに過ご」しました。また、飛び入りで、辻道さんの詩吟や山崎さん（プロとして活動中）のオペラが加

わりました。プッチーニのオペラ「ジャンニ・スキッキ」の中のアリア「私のお父さん」の離れて暮らす父を気遣つて父の心情を思いやる娘心、親子の絆が切々と伝わるソプラノは素晴らしいです。アンコールでカンツォーネも披露していました

だき、老体も奮い立つようなインパクトがありました。

法話に料理、歌、演奏、合唱、詩吟、オペラと錦上花を添える新春の門出にふさわしい華やかな会となりました。記念撮影後、午後四時過ぎに散会となりました。

一一〇一〇年、東京オリンピックの年、元氣をもつて今年もがんばりましょう。



「師主知識の恩徳」・曇鸞大師（前半）

副住職



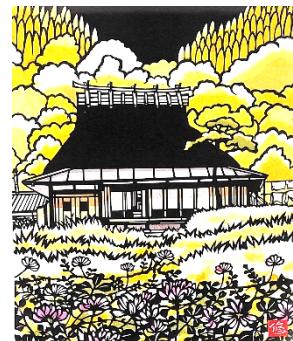
今回は七人の高僧のうち中国の曇鸞大師について紹介させていただきます。

曇鸞大師は十代の若さで仏門に入られましたが、幼少期、青年時代の詳しいことはよくわかつてはいません。有名な五台山で修行されたともいわれています。当時の中国で盛んに学ばれていた龍樹菩薩の著書と弟子の聖提婆の著書をあわせた「四論」を曇鸞大師も深く学び、大乗佛教の「空の教え」に精通されていました。そしてさらに、六〇巻もあり難解な「大集經」を学ぶのですが、その内容が奥深く容易に納得できないことを遺憾に思ひ、その注釈書を「自身で書く」とを決意します。しかしながら、そのとき既に年齢は五十才をすぎており、また苦労が重なつて病を患つてしましました。注釈書を完成させるためには、まず健康と長寿でなければ困難であると感じた曇鸞大師は、当時神仙の巨匠と仰がっていた陶弘景を訪ねることにしました。そして、望み通り長生の法を授かります。帰国の途中、洛陽の都にて三藏法師

の菩提流支との劇的な出逢いがありました。インド出身の三藏流支に対して曇鸞大師は自分が授かっただばかりの神仙経を手に、誇らしげに「インドには、中国の長生の法に勝るものがありますか」とたずねました。しかし、三藏流支から「たとえこの世に長く生きたとしても束の間、結局は生死流転するだけのことだ」と一括されます。そして、この世で長生きするための教えより、生死の迷いを離れた無量寿の世界、浄土に生まれ往く阿弥陀仏の教えを勧められます。三藏流支から浄土論（觀無量寿經という説もある）を受取った曇鸞大師は、その場で陶弘景から授かった仙經を焼き捨ててしまいます。そうすることで浄土の教えに帰依したことを示したのでした。正信偈の中に「三藏流支授淨教 梵燒仙經帰樂邦」とあるのがこの場面です。

天親菩薩の浄土論を三藏流支が中国語に翻訳し、それを受取った曇鸞大師が浄土論の注釈をお作りになりました。正信偈に「天親菩薩論註解」とあります。これが「淨土論註」です。親鸞聖人は三十代半ばに、天親と曇鸞の一文字ずつを取つて親鸞と改名されました。親鸞聖人の教えは、この御一人の説かれた教えを根幹にしていることを示しています。（次号へ続く）

法語カレシダ



いたかれてありとも
知らずおろかにも
われ反抗す
大いなるみ手に



今回は、五月の「とば」を紹介します。これは、九條武子夫人による短歌です。

赤ちゃんがお母さんに抱かれて、お乳を飲んでいるときは、不安を感じることはない。それは、赤ちゃんがお母さんにすべてをゆだねきっているからで、お母さんの愛情の深さ、尊さがあればこそです。同じように、私は阿弥陀さまの大いなる慈悲の手に抱かれているのに、それに気づかない。それを無視して、自分中心の思いを常にもち、自分が起こす苦しみなのに愚痴をこぼし、知らぬまに人を傷つけている。阿弥陀さまの救いに反抗するかのような愚かな生き方をしているのがこの私だと、この歌を詠まれたのです。

阿弥陀さまのひかりに照らされた私は、自らの煩惱にまみれ、自己の力ではとうてい仏に成りようのない人間だとなげく心と、その無力な自己を深く見つめ、自分のこととして味わうときに、逆にその私に願いをかけ、仏にならそうとする阿弥陀さまの他力の救いが、真実のはたらきとして今あることを喜ぶ心の二つが他力の信心の内容です。

自分の力で消すことができない煩惱という罪を自分のこととして深く省みると、阿弥陀さまのはたらきがまことの救いとして、喜び受け入れられるのです、

本願寺二十一代大谷光尊さまのご息女。兄は大谷探検隊で有名な二十二代大谷光瑞さまです。才色兼備で、大正三美人と称されました。公爵家出身の九条良致に嫁ぎます。兄嫁とともに仏教婦人会を創設したり、京都女子専門学校（現在の京都女子学園・京都女子大学）を設立したりします。そして、関東大震災で自らも被災し、築地本願寺の再建や負傷者及び孤児の救済事業に取り組んでいます。しかし、その慈愛が彼女の寿命を縮めてしまつたのかかもしれません。昭和三年に、敗血症で往生します。まだ四十一歳でした。



信行寺行事予定とご案内

春の彼岸法要

三月二十一日（土）羽渕了先生

*法話の後、お斎をご一緒に

二十二日（日）住職

両日とも午後二時より

第十八回 門信徒会総会

四月一十五日（土）午後二時より

おつとめ・総会・法話

*門信徒の皆様、多くの参加をお待ちしております。

花まつり

四月六日（月）午前十時より

甘茶・灌仏・献花献灯などを行います。お孫さんや知人等お誘いください。いたやど保育園の園児さん達と一緒に楽しい時間を過ごしましょう。

編集委員より

私事ですが、昨年母が往生しました。「寂しくなられましたね」「一緒にしやべりましょうね」「お食事行きましょう」と声をかけたり、誘つたりしてくださるまわりの方々の優しさが私を支えてくれました。そしてもう一つ。坊守さんに教えて頂いた歌がとても支えになりました。それは佐賀県神埼町（現神埼市）の真光寺さんのご門徒さん、故佐藤キナさんが作詞され真光寺坊守、田中美根子さんが作曲された「ひとりじやなかもん」という歌です。

一	ひとりじやなかもん	み仏と	いつしょに朝食いただいて
二	ひとりじやなかもん	み仏と	よもやま話に花さかせ
三	ひとりじやなかもん	み仏に	不平も愚痴も話します
四	ひとりじやなかもん	み仏は	笑ってうなづきなさいます
五	ひとりじやなかもん	み仏の	お慈悲のふとんに眠ります
六	ひとりじやなかもん	み仏と	大悲の朝をむかえます

本当にその通りだなあと心にすとんと落ちた歌でした。この歌詞は、キナさんが往生された後にベッドの奥から出てきたのだそうです。今は佐賀教区の仏教讃歌となり、多くの場で歌われています。食事をいただく時、朝夕のお勤めをする時、季節の花をお供えする時、「ひとりじやなかもん」という佐賀弁の優しい言葉がいつも私の心にあります。核家族が増え、一人暮らしの方が多くいらっしゃる今の世の中ですが、一人でいても独りではありませんね。如来さまも、親鸞さまもいつも私と一緒にします。

木下 雅恵